小樽れっけん

小樽の歴史的建造物ものがたり

国立大学法人小樽商科大学　文部科学省 地(知)の拠点　×　小樽チャンネル

まえがき

小樽には、街のいたるところに歴史的建造物がのこっており、魅力的な景観をかたちづくっています。それらは店舗などに活用され、観光資源として親しまれていますが、建物の説明や紹介は建築様式などが中心で、建物にまつわるエピソードや小樽の歴史との関連などを知ることは容易ではありません。

小樽商科大学では、文部科学省の地（知）の拠点整備事業の一環として、小樽の歴史的建造物の調査研究を行っています。この冊子では、建物関係者への取材と関連資料に基づき、歴史学や民俗学の手法によって建物にまつわる物語（ストーリー）および小樽の歴史における意義をわかりやすく紹介しています。建物の写真は小樽商科大学写真部を中心とする学生が撮影し、文章は本学グローカル戦略推進センター研究支援部門地域経済研究部が担当しています。

今回は、新店舗の開店や閉店、新資料の発見、イベント関連など、最近話題になった12の建物を取り上げました。次々と歴史的建造物が解体されていく中で、この冊子が小樽の歴史的建造物の魅力を再発見し、保存・活用につながるきっかけの一つとなれば幸いです。

目次

小樽れっけんマップ …… p3
龍徳寺・金比羅殿 …… p4
旧渡邊徳次郎商店 …… p6
旧百十三銀行小樽支店（小樽浪漫館） …… p8
旧塩田別邸（夢二亭） …… p10
旧白鳥家番屋 …… p12
旧杉本花月堂（松月堂） …… p14
小樽港斜路式ケーソン制作ヤード …… p16
旧荒田商会（ニトリ小樽芸術村アール・ヌーヴォーグラス館） …… p18
小樽聖公会 …… p20
旧衣斐質店 …… p22
旧久保商店（くぼ家） …… p24
中央市場 …… p26
あとがき …… p28

おたる・しりべしの魅力を発掘する小樽商科大学

小樽れっけんマップ

祝津方面

旧白鳥家番屋
小樽市祝津３丁目 191

小樽市街周辺

国立大学法人小樽商科大学　文部科学省 地（知）の拠点

金比羅殿　龍徳寺本堂の左側に隣接している

龍徳寺・金比羅殿
（小樽市真栄１丁目 3-8）
安政 4（1857）年、開創。同 6 年、龍徳町（現・信香町）に仮本堂と金比羅殿が建立。明治 2（1869）年に若松町、同 7 年に新富町（現在地、現・真栄）に移転。現在の建物は、同 9 年に本堂、同 22 年に金比羅殿が上棟された。金比羅殿の棟梁は明治期に小樽の主要な建物を次々に建築した加藤忠五郎。龍徳寺境内には加藤家の墓がある。平成 6（1994）年、本堂が小樽市指定歴史的建造物に指定。境内の「夫婦イチョウ」は同 5 年に小樽市の保存樹木 1 番に指定されている。

ひと塊の木材から削り出されたものとしては、日本で最大の木魚。昭和８年に市内の産科医が寄進

金比羅殿内の船絵馬

【参考文献】
『龍徳寺開創百五十年誌』（海雲山龍徳寺、2008年）、「龍徳寺で船絵馬発見」『北海道新聞』（小樽・後志版、2016年3月24日付）、「船絵馬　小樽の新名物に」『北海道新聞』（小樽・後志版、2016年4月2日付）

【謝辞】
龍徳寺住職の有田恵宗さん、土屋周三さん、駒木定正さん、小樽市総合博物館のご協力をいただきました。感謝申し上げます。

龍徳寺・金比羅殿（りゅうとくじ　こんぴらでん）

北前船の船絵馬がのこる、小樽の海運業者の信仰拠点

龍徳寺は、小樽で最も古い本堂、そして日本最大級の木魚があるお寺として、小樽市民にも観光客にもよく知られている。安政４（１８５７）年、当時のヲタルナイ場所に多数の和人たちが流入しつつあったことに注目した函館・高龍寺の和尚の発願によって開創された。明治初期には榎本武揚軍の屯所になり、彰義隊の隊士たちが起居していたこともある。

最近、小樽商科大学の調査により、龍徳寺の本堂左側に隣接する金比羅殿内に船絵馬が８枚あることがわかった。船絵馬は、江戸時代以降、北前船の船主らが航海の安全を祈願して寄港地の寺社などに奉納した。東北の日本海沿岸や北陸をはじめ道内各地にも多数残っているが、小樽では祝津恵美須神社の2点しか知られていなかった。

船絵馬には船名や奉納者の名前・出身地、奉納年、絵師の名前などが記載されていることがあり、歴史資料として重要であるほか、美術品としての魅力もある。北前船は小樽の発展に大きな役割を果たしたが、船主たちによって建設された石造倉庫以外、目に見える痕跡は乏しく、船絵馬は貴重な存在と言える。

船絵馬は一般的には神社に奉納されるもので、龍徳寺にあるとは思われていなかった。龍徳寺では、創建当初から龍神を祀る龍宮殿が設置されていたが、明治22（１８８９）年に金比羅を祀る金比羅殿として再建され、仏と共に鎮守されていることが特徴である。

金比羅は海上交通の守り神として海運業者や漁師などに信仰されるが、龍徳寺では明治24年に「小樽金毘羅保存会」という組織が結成され、藤山要吉や塩田安蔵ら海運関係の名士たちが会員となっている。金比羅殿が小樽の人びとにとって重要な存在であったことがわかる。会員の居住地は小樽にとどまらず、道内各地や本州にまで広がっていて、当時の小樽と各地の交流の深さがうかがえる。

船絵馬には地元小樽のほか、新潟の人が奉納したものも含まれている。龍徳寺・金比羅殿とその内部の船絵馬は、海の都市・小樽のはじまりの記憶をいまに伝えてくれる。

文章・撮影：高野　宏康（小樽商科大学学術研究員）

きゅうわたなべとくじろうしょうてん
旧渡邊徳次郎商店

梁川・稲北界隈のランドマーク

梁川通りの北側、稲北界隈にそびえ立つ褐色のタイル張りの豪勢な建物は、日本酒の製造・販売会社・山二わたなべの社屋で、渡邊徳次郎（創業から二代目）が建てたものである。この界隈のランドマークとして親しまれているこの建物は、平成5（1993）年に小樽市指定歴史的建造物に指定されており、小樽の代表的な歴史的建造物の一つとしてよく知られているが、「北宝」「北海熊古露里」などの人気銘柄を持つ山二わたなべがどのような歴史を歩んできたのかはほとんど知られていない。

創業は明治12（1879）年、米穀店および酒類雑貨の販売店として営業を開始した。大正12（1923）年に、清酒会社の経営を引き受けることになり、清酒の製造を開始。その後、不動産業をはじめ、昭和20（1945）年には398戸の賃貸物件を持つに至ったという。

昭和25年6月、徳次郎が亡くなると、当時、北海道大学に在学中だった息子の晶が二代目徳次郎となり、あとを継いだ。昭和29年、製造部門を渡邊酒造株式会社として法人化し、市内錦町の工場で製造を行っていたが、昭和48年に工場を閉鎖。その後は北の誉酒造に醸造を委託するようになった。最盛期には年間200キロリットル以上を製造していたという。

同社の酒造の特徴の一つは小樽のイメージを取り入れた酒造りを行ってきたことにある。平成2（1990）年に発売した「おたるの灯」は、懐古的なイメージを持つ裸電球の型にかさを付け、栓も電球の口金型という凝ったガラスの瓶になっていた。平成7年に発売した「しずか号」は、会社の石蔵から手宮線を建設するときに使用したと思われる明治期の「トランシュット」という米国製の測量道具が発見されたことがきっかけにつくられ、小樽観光のアピールに一役かった銘柄として話題になった。

平成28年1月に北の誉酒造が合同酒精に吸収合併されたことで、山二わたなべは「小樽の地酒」のブランドを守れないことから酒造からの撤退を決定した。昭和初期の小樽最盛期の記憶をいまにつたえる山二わたなべの社屋とその歴史は、今後も小樽のかけがえのない歴史遺産として、まもり、語り継いでいかなければならない。

撮影：小樽商科大学写真部（落合 亮、葛西愛香）
文章：高野 宏康（小樽商科大学学術研究員）

屋上の塔屋。軒先には雷文と古代ギリシャ建築に用いられた卵鏃（らんぞく）模様（卵と鏃で両性具有を象徴すると言われる）が施されている。

旧渡邊徳次郎商店
（小樽市稲穂4丁目6-1）
昭和5（1930）年建築。設計者は須崎設計事務所。木造3階建。屋上には塔屋がのせられている。建物外壁の褐色のタイル、軒先の雷紋、卵と鏃の模様が特徴的。2階の窓上には酒樽の看板が掲げられている。店舗内は天井に模様を型押しした金属板が張られ、壁面には鏡が飾られるなど、昭和初期のモダンなデザインが取り入れられている。店舗と蔵は室内でつながっており、蔵の出入り口周辺には漆喰で鳳凰が描かれている。平成5（1993）年、小樽市指定歴史的建造物に指定された（第37号）。

2階窓上の酒樽看板（北宝）

蔵の出入り口。店舗と蔵が室内でつながっている。

2階廊下と洋間の入り口。幾何学的なデザインが特徴的。

旧店舗内部。天井には模様を型押しした金属板が張られている。

蔵の扉の上部に漆喰で描かれた鳳凰。

2階洋間。昭和初期のモダンなデザインが取り入れられている。

【参考文献】
「酒類販売業免許申請書」（渡邊酒造株式会社、1996年）、「（株）山二わたなべ」『小樽の建築探訪』（1995年）、「渡邊酒造店」『歴史的建造物の街 小樽』（2012年）、「山二わたなべ 酒造から撤退」『北海道新聞』（小樽・後志版、2016年1月27日付）

【謝辞】
菊地貴俊さん、菊地仁美さん、井田良さんにご協力いただきました。感謝申し上げます。

きゅうひゃくじゅうさんぎんこうおたるしてん　おたるろまんかん

旧百十三銀行小樽支店（小樽浪漫館）

小樽の歴史が凝縮された、観光商店街の銀行建築

銀行街から堺町方面に歩いて行くと、妙見川と堺町通りの交差点に一際異彩を放っている建物がある。一見、近年のテーマパークのようにも見えるこの建物は、明治期に第百十三銀行小樽支店として建設されて以降、様々な変遷を遂げ現在に至っており、小樽の歴史をいまに伝える建物である。

明治12（1879）年1月、函館で設立された第百十三国立銀行は、明治26年に小樽へ進出。この建物よりやや南側に初代小樽支店がつくられた（現在の海鳴楼）。明治41年、業務拡大に伴い小樽支店が手狭となり、二代目としてこの建物がつくられた。当時は軟石が表面に貼られ重厚な印象だったとはいえ、三角破風にギリシャ風の柱、五角形のこの建物は、数多の小樽の銀行建築の中で最も特徴的なものの一つで、当時の小樽の繁栄を象徴しているといえる。

合併統合を経た後、この建物は住友銀行となったが、1960年代に小樽から銀行が次々と撤退する中、昭和36（1961）年、同行も小樽支店が閉鎖となった。その頃、鉄道工事の関係で移転先を探していた広告・デザインを手がける株式会社F藤森がこの建物を落札した。F藤森は後に潮まつりの創設や運河保存運動で知られる藤森正章・茂男兄弟の会社である。当時の住友銀行支店長が藤森兄弟に理解を示したことが落札につながったという。

この建物は藤森兄弟一家も暮らした職場兼住居であった。2階の応接室には小樽市役所や小樽運河を守る会の関係者たちがいつも出入りしており、様々な話し合いが行われた。茂男の妻で日本舞踊の師匠の茂子は、娘たちを連れてここから稽古場へ通っていた。小樽運河を守る会で茂男と知り合った山口保はF藤森で働くことになり、しばらくの間この建物に通った。昭和52年、兄正章が急逝し茂男も病に倒れ、90年続いた会社は翌年12月に閉鎖。藤森家の家族たちはこの建物を離れることになった。

その後、この建物は千秋庵となり外観が大幅に改修され、平成15（2003）年には小樽浪漫館がオープンした。観光商店街として華やかな堺町通りのこの建物には、明治期の銀行の繁栄から運河保存運動、そして観光地化していった小樽の歴史が凝縮されている。

撮影：小樽商科大学写真部（落合亮、葛西愛香、王禹潼）
文章：高野 宏康（小樽商科大学学術研究員）

最上部の三角破風（ペディメント）。内部にレリーフ装飾が施されている。古代ギリシャ建築風の柱が支える形になっている。

旧百十三銀行小樽支店(小樽市堺町1-25)明治41（1908）年の建築。木骨石造2階建。設計者は池田増次郎、施工者は大虎（加藤忠五郎）。角地に隅切りで玄関が設置されている。五角形の変則的な建物で、古代ギリシャ建築風の正面柱型と三角破風（ペディメント）、屋根瓦が特徴的。当初、外壁は軟石で重厚な印象だったが、後年、外壁に煉瓦タイルが貼付された。千秋庵となった時、外観を大幅に改修。小樽浪漫館オープン時、背面に建物が増築された。内部は当時の銀行建築の流行だった吹き抜けホールになっている。昭和60（1985）年7月、小樽市指定歴史的建造物に指定（第5号）。

小樽浪漫館の店内。ライトアップとアンティーク家具などによりレトロな雰囲気が演出されている。

堺町通りからみた外観。表面に煉瓦が貼られ、一見、木骨石造建築にみえない印象の建物となっている。

2階の天井。木骨石造の建物構造がよくわかる。

建物背面。軟石がのこっており当時の様子がうかがえる。手前は平成15年に増築された部分。

2階から1階へと続く階段。

2階。F藤森時代は職場兼住居となっていた。

【参考文献】
『語り継がれる町総集編 第3号』（北海道新聞販売所会どうしん三日会、1995年）、『歴史的建造物の街 小樽』（2012年）、『小樽の建築探訪』（1995年）、平山秀朋「株式会社F藤森」特別展「デジナーレの精神～藤森茂男の実像～」展示解説、2015年）

【謝辞】
小樽浪漫館、藤森五月さん、山口保さん、平山秀朋さんにご協力いただきました。感謝申し上げます。

旧塩田別邸（夢二亭）

きゅうしおだべってい　ゆめじてい

小樽～樺太間に豪華貨客船を就航させた、海運業の風雲児の別邸

この建物は、近年、ハンバーグが気軽に食べられる洋食店として親しまれていたが、今年1月末から長期休業に入り、気になっていた人も多いのではないだろうか。7月1日から「夢二亭」の名称はそのまま、新たなオーナーにより営業を開始した。大正初期、小樽有数の回漕店主・塩田安蔵の別邸として建てられたこの建物の歴史を辿っていくと、小樽の盛衰が見えてくる。

塩田回漕店は明治22（1889）年に創業。初代安蔵は明治20年代には堺町と南浜町（現色内）に店を構えていた。堺町の店舗は北前船主や船頭たちの定宿になっており、大家七平や広海二三郎たちが小樽に滞在する際、同店の二階に宿泊するなど、特に北陸の北前船主たちとのゆかりが深かった。

二代目安蔵は、明治15年、新潟県柏崎町生まれ。中学四年の時、塩田回漕店支配人の親戚だった縁で、養子に迎えられた。負けず嫌いな性格で、船を持たなければ大きなことはできないと初代安蔵を説得。昭和初期に1600トンの豪華貨客船「永宝丸」を購入、小樽～樺太間を就航させた。客室は一流料亭顔負けの豪華さで、長旅に退屈しないよう客室で酒が飲める趣向が凝らされた。当時、樺太航路には数十隻の船が就航していたが、この船だけは常に満員だったという。

満州事変後は好景気に乗じて破竹の勢いだったが、色内町の店から出たところで自転車にはねられ、まもなく死去した。56歳であった。おとなしい人柄だったが、これと決めたことは全力でやり遂げたという。500円で小さな家が建つ時代、この建物には3万5千円をかけた。市が区画整理で道路をつけたいというと入船町の土地を快く寄付した。

その後、昭和27（1952）年、製材業の風下新作がこの建物を購入、邸宅とした。昭和30年代には質屋を営む傍ら貸間にも利用された。平成3（1991）年、この建物に魅了された新作の孫・正仁が復元改修を行い、郷土料理「小樽夢二亭」をオープンした。

歴建活用の成功例といわれたが、同店は平成23年7月に事業停止。同年12月、札幌の建設会社が全面改装したが平成28年1月末で閉店となった。大正ロマンの魅力あふれるこの建物が新オーナーの下、末永く人びとに親しまれることを期待したい。

撮影：落合 亮（小樽商科大学写真部）
文章：高野 宏康（小樽商科大学学術研究員）

内玄関。右奥に石倉が見える。

石蔵入口。木骨石造の石造倉庫。内部は客席となっている。

旧塩田別邸（小樽市入船 2-8-1）
正確な建築年は不明だが、蔵の鍵に付いていた札の記述から大正元年（1912）頃と推察されている。洋風を取り入れた和風建築で、木造平屋、一部二階建て。母屋はむくりのある切妻屋根が特徴的。中廊下を挟み玄関側に和室 5 室、奥に和室 2 室。欄間は天然記念物の屋久杉、床板は全面虎斑の栃の木、ガラスの一部にはウラン鉱石など、内装に貴重な建材が使用されている。平成 3（1991）年、建築当時の魅力を活かした改修が行われ、同年、小樽市都市景観賞を受賞（第 4 回）。平成 11 年、小樽市指定歴史的建造物に指定（第 67 号）。

ムラサキの間。欄間と天井には屋久杉が用いられている。

応接間。本杉の透かし欄間、薩摩杉天井など、貴重な建材が使用されている。

庭園。樹齢百年余りのおんこの木、恵山つつじなど、花々が季節ごとに表情を変える。

建物見取図（一階）。建築当時、塩田安蔵が描いたもの。「大玄関」の左側に応接間と茶室、縁側奥に「大広間」があったことがわかる。

金庫。重厚な黒塗り。下部に車輪が付いている。東京の大日本金庫製作所製。

【参考文献】旧塩田別邸（夢二亭リーフレット）、越崎宗一『新版北前船考』（1972年）、『語り継がれる町総集編第1号』（1994年）、『小樽の歴史的建造物』（1994年）、「小樽経済 百年の百人㉒ 二代目塩田安蔵」『北海タイムス』（1965年7月23日付）

【謝辞】福地真寿美さん（WITH株式会社）、林康孝さん（株式会社オフィスHK）にご協力いただきました。感謝申し上げます。

きゅうしらとりけばんや

旧白鳥家番屋

ニシン漁場の記憶を伝える、祝津「三大漁家」の番屋建築

地元の人たちが「番屋通り」と呼ぶ、祝津の道道小樽海岸線沿いは、ニシン漁場建築が最も多く集中するエリアの一つである。祝津の三大漁家と呼ばれた白鳥家の鰊番屋は、平成22（2010）年に建物を活用した郷土料理店が閉店後、番屋巡りツアーなどで見学の機会があるが、この番屋の主、白鳥家の歴史はほとんど知られていない。

白鳥家の始祖・喜四郎は祝津で漁業を営んでいたが、刺網漁の漁獲量の少なさを打開すべく、安政4（1857）年に当時禁止されていた建網の使用許可を得、さらに慶応元（1865）年には建網の改良に成功。漁獲量を飛躍的に増加させた。喜四郎は祝津の有力者となり、同10年には地区の総代となった。

祝津の一鰊漁家から白鳥家を大きく飛躍させたのは、喜四郎の養子・永作である。永作は、羽後国（山形県）飽海郡の本間家長男に生まれ、安政2（1855）年、蝦夷地に渡来。松前、厚田、浜益と渡り歩いた後、余市の場所請負人・林長左衛門の家に奇遇した。そこで人物を認められ、出張所があった祝津の漁場支配人として赴任。明治7年に喜四郎の養子となり、同14年に喜四郎が病没すると家督を継いだ。

明治19年、永作は白鳥商店を設立し、海産物問屋、肥料販売業、倉庫業、担保貸付など、多方面に事業を拡大していった。保有した宅地は2132坪、耕地13万6434坪、漁場11カ所、建網28統、漁船は大小84隻。雇漁夫は240人程といわれ、その経営規模は破格であった。

永作の死後、明治39年に白鳥家一族は資本金10万円で白鳥合資会社を色内町に設立。同42年には稲穂町に白鳥家の別邸を建てた。しかし、大正12年頃から経営不振となり、やがて建物は売却された。ちなみに、別邸は昭和23（1948）年に進駐軍向けビアホール「GENDAI」（同26年、キャバレー現代に改称）となり、同49年に庭内の石蔵は蕎麦処「藪半」の座敷として再利用された。

平成6（1994）年、取り壊して観光客用トイレを建設する計画が持ち上がったが、翌年、花園で「江差亭」を経営していた干場豊氏が買い取り、郷土料理店「群来陣」を開店。祝津の観光スポットとなった。同22年6月に同店が閉店後、建物は閉鎖されたままとなっている。小樽の貴重な歴史遺産が再び活用されることを期待したい。

撮影：齋藤 朗（小樽商科大学教授）
　　落合 亮（小樽商科大学写真部）
文章：高野 宏康（小樽商科大学学術研究員）

おたる・しりべしの魅力を発掘する小樽商科大学

旧白鳥永作番屋（小樽市祝津3丁目191）明治10年代の建築。木造平屋、一部二階建て。広さは1階342.5㎡、2階70.6㎡。大工は大棟梁が小林秀作、脇棟梁が土門倉次。祝津最古の番屋遺構であり、初期鰊番屋の建築として貴重。北海道の漁家の中でも極めて古い形態で、親方の住まいとヤン衆（漁夫）の居住部分が大屋根で一体化している。向かって左手側は主人の住まいで床の間や欄間が設けられた和風住宅、右手側はヤン衆の居住部分で上部に「ネダイ」が吊り下げられている。1995年、小樽市指定歴史的建造物に指定（第62号）。翌96年、小樽市都市景観賞を受賞。

建物向かって右手側の漁夫の居住部分。一部、飲食店用に改装されている。上部にL字型に設置された「ネダイ」はボルトで吊られる珍しい構造。

木骨の柱のすぐ下に「ネダイ」が設置されている。

建物下端の持ち送り部材には繊細な牡丹唐草が彫り込まれている。

屋根の上の煙出し。内部は吹き抜けになっている。

むくり破風を冠した玄関。向かって右手側の漁夫用。

囲炉裏付近。飲食店時代には客席として使用された。

親方の居住部分の和室。

建物側面（向かって左手側）。

【参考文献】
『小樽市の歴史的建造物』（1994年）、『小樽の建築探訪』（1995年）、『歴史的建造物の街 小樽』（2012年）、『最新版 小樽歴史探訪』（1999年）

【謝辞】
山本晋さん（株式会社ジェネシス札幌）にご協力いただきました。感謝申し上げます。

旧杉本花月堂（松月堂）

受け継がれる老舗菓子店舗の系譜

小樽の中心部、稲穂町の一角に老舗の趣をかんじさせる菓子店舗がある。現在、松月堂が営業しているこの建物は、当初、小樽の老舗菓子店・杉本花月堂の店舗だった。今回は、杉本花月堂から松月堂に至るこの老舗菓子店舗の歴史を紐解いてみたい。

杉本花月堂は、嘉永4（1851）年に越後・新発田藩（現新潟県）で杉本次郎吉によって創業。藩の御用菓子司となったが、二代目次郎吉が政治に関って失敗したこともあり、明治36（1904）年、三代目治三郎が小樽へ渡り、住ノ江町で問屋へ納める菓子の下請から始め、翌37年に杉本花月堂を開業した。

創業時に誕生した「かすてら」は全国菓子博覧会で最高賞を受賞し、昭和3（1928）年には秩父宮が命名した「深雪の里」が人気商品となるなど、小樽を代表する菓子店に成長した。同21年には株式会社杉本花月堂を設立。同25年に札幌進出。同28年には「花月会」を創設し、菓子の通信販売を展開した。

ところが拡大路線が行き詰まり、昭和35年11月、一億円の負債を抱えて倒産し、更正会社となるが、創業家、管財人、社員が対立することになった。五代目定応の弟で副社長の南澤賢治は退任後、店舗の隣に「有限会社丸花すぎもと」を開業。創業家の「杉本」と更生会社が分離するかたちとなった。その後、更生会社は裁判に敗れて店舗は創業家の所有となったため、同47年に稲穂大通り商店街沿いに移転し、同56年には社名を「花月堂」とした。その後、多店舗展開が失敗。平成23（2011）年に北武グループに事業譲渡された。

旧杉本花月堂の店舗で営業を再開していた南澤賢治が昭和57年に急逝すると、「丸花すぎもと」は廃業となり、翌58年に杉本花月堂とゆかりが深い松月堂の店舗となった。

松月堂の創業者、奥村教造は江差のニシン漁家に生まれ、小学校の頃、小樽に渡り杉本花月堂で奉公するようになった。やがて工場長となった教造は大正7（1918）年に独立し、緑町で松月堂を創業。店名は花月堂の「花」を「松」にして命名した。二代目泰吉は杉本花月堂で2年程修行して松月堂を継ぎ、同58年にこの建物へ移り現在に至っている。杉本花月堂の店舗と菓子はともに松月堂へ受け継がれていったのである。

撮影：落合 亮（小樽商科大学写真部）
文章：高野 宏康（小樽商科大学学術研究員）

旧杉本花月堂（小樽市稲穂1丁目8-13）大正 5〜6（1916〜17）年頃の建築と推定されている。木造二階建て。

「杉本花月堂」時代の店頭。写真提供：南澤良夫

店内。以前は入口から向かって左側（奥）が隣の建物とつながっており、現在より広かった。

看板。「パヌモア」はフランス語で「松」と「月」を意味する。中央部には「杉本花月堂」の「杉本」が記載されている。

2階部分。居住スペースとなっている。

「マロンどら焼き」は松月堂が現在地に移転後、5年程かけて開発。昭和60年頃に発売され、現在まで人気商品となっている。

「杉本松月堂」と記載されたプレート。

【参考文献】
坂田栄子「百年ののれんと私（全34回）」『北海道新聞』夕刊、1987年2月12日 - 3月24日、『小樽昭和ノスタルジー』（2013年）、『別冊太陽 和菓子風土記』（2005年）

【謝辞】
奥村泰吉さん（菓匠松月堂会長）南澤良夫さん（小樽信用金庫理事）にご協力いただきました。感謝申し上げます。

おたる・しりべしの魅力を発掘する小樽商科大学

小樽港斜路式ケーソン製作ヤード

小樽築港の歴史をいまに伝える近代化遺産

小樽港南防波堤の基部にそびえ立つ2つの巨大なブルーのクレーンは、小樽港のランドマークとして長く親しまれてきたが、今年（平成28年）解体されることになった。このクレーンは、防波堤等の建造に使用されるコンクリートの函（ケーソン）を製作する施設の一部である。ここでは、当時、世界で初めてケーソンを斜路上でつくり海中に滑り落とす画期的な進水方式を採用し、日本の近代港湾の発展に大きく貢献したこの施設と、考案者の伊藤長右衛門の歩みをたどってみたい。

小樽港の外洋防波堤は明治中期から大正期にわたる2期の工事によって完成した。第Ⅰ期工事（1897-1908）では、初代小樽築港事務所長・廣井勇の指揮により北防波堤1289mがつくられた。廣井はコンクリートブロックを斜めに積む最新工法など斬新な新機軸を次々と実現し、日本人技師として初めて本格的な外洋防波堤の建設に成功した。続く第Ⅱ期工事（1908-1921）を指揮したのが、3代目小樽築港事務所長の伊藤長右衛門である。

伊藤長市（後に家名の長右衛門を襲名）は、明治8（1875）年、福井県生まれ。同32年、東京帝国大学に入学。当時、小樽築港事務所長と東京帝国大学教授を兼務していた廣井勇に「寡黙沈毅」な性格を高く評価され、卒業後の同35年、小樽築港事務所に勤務することになった。同41年、第Ⅱ期工事開始と同時に所長となった伊藤は、軍艦の進水式にヒントを得て、ケーソンを斜路上でつくり海中に滑り落とす進水方式を考案した。

同45年から製作を開始したケーソンにより、南防波堤932m、島防波堤915m、北防波堤の延伸部419mが次々と造られていった。ケーソン工法はすでに神戸港で採用されていたが莫大な設備と水深が必要であった。伊藤が考案した進水方式はこれらの難点を解決し、さらに工費の大幅削減、工期短縮を実現させた。

昭和10（1935）年、副防波堤の工事指導中、技師に副防波堤の堤先に建てる灯台の題字を依頼された伊藤は、自分の死後、灯台に遺骨を埋めてほしいと遺言し、同14年に亡くなった。遺言により遺骨の一部が北防波堤の先端の記念碑に納められ、今も小樽港を見守っている（と、みなと資料館のリーフレットは記すが、愛用の碁石と謡曲の本とする文献もある）。

クレーンは解体されたが、土木遺産として保存される斜路とみなと資料館、そしてこの記念碑は、ケーソン製作ヤードの意義と伊藤の偉大な功績をいまに伝えてくれる。

撮影：小樽商科大学写真部（井上優太、葛西愛香、高橋聡）

文章：高野宏康（小樽商科大学学術研究員）

解体工事中のケーソンクレーン。2016年9月30日撮影。

小樽港斜路式ケーソン製作ヤード
（小樽市築港2-2）
小樽築港第Ⅱ期修築工事（明治41年-大正10年）に際し、伊藤長右衛門によって考案。大正元（1912）年から平成17（2005）年までにケーソンを約800函製作した。平成28年に解体されたクレーン部分は昭和10（1935）年に建造されたもの。クレーンは鋼鉄製、高さ23m、アームの長さは30m。最大2トンの重量物を持ち上げることが可能。ヤード中央の斜路は、陸上部分が60m、水中部分が64m、斜路の平均勾配は約10%。平成21年、土木学会選奨土木遺産に認定。

ケーソンヤードの斜路。斜路部分は土木遺産に指定されており、今後も保存される。

銀燐荘からの眺望。手前はケーソンヤード。北防波堤先の灯台に伊藤長右衛門の頌徳碑がある。

おたるみなと資料館。昭和59年開館。平成11年にケーソンヤードそばに移転・新築。

ケーソンヤードの模型。ケーソンが滑り落ちる様子を体感できる。

在りし日のケーソンクレーン。

コンクリートブロック。留め具には旧手宮線のレールが使用されている。

【参考文献】『伊藤長右衛門先生伝』（1964年）、『小樽築港100年のあゆみ』（1997）、「小樽港のシンボル！ケーソンクレーン解体撤去！」『小樽ジャーナル』（2016年10月3日付）、「小樽港クレーン撤去へ」『北海道新聞』（小樽・後志版2016年10月19日付）

【謝辞】今宗紀さん（北海道開発局小樽開発建設部小樽港湾事務所所長）および小樽港湾事務所の皆様にご協力いただきました。感謝申し上げます。

きゅうあらたしょうかい

旧荒田商会（ニトリ小樽芸術村アール・ヌーヴォーグラス館）

小樽で成功を収め、故郷に大きな恩返しをした実業家の本店

近年、小樽のかけがえのない地域資源である歴史的建造物が次々と取り壊されていくなか、今年7月にオープンした「ニトリ小樽芸術村」は、新たな小樽の観光スポットとして注目を集めている。

この施設は3つの歴史的建造物を活用しており、その一つ、アール・ヌーヴォーグラス館は臨港線沿いの旧荒田商会の建物である。この建物は最近まで店舗等に利用されていたこともあり、市民や観光客に親しまれてきたが、荒田商会とその創業者・荒田太吉の歴史はほとんど知られていない。

荒田太吉は、明治10（1877）年、福井県丸岡町の生まれ。15歳の時、根室に渡り父の雑貨小売店の仕事を手伝っていたが、独立したかったため家出して小樽へやってきた。その後、網走や樺太を転々として雑貨商や米穀商など様々な職業に従事したが、明治43年に再び小樽に渡って海陸物産商を開業した。大正6（1917）年には荒田汽船株式会社を設立。汽船7隻を運航させて道内、本州、樺太の各港で貿易を行い、昭和4（1929）年に荒田商会を設立した。その後も漁業、農業、鉱油販売業など多角経営を展開し、多数の会社社長、大株主を務めた。

成功者となった太吉は積極的に社会貢献を行うようになった。小樽では、小樽警察署署員合宿所、小樽高等女学校などに多額の寄付をし、戦後、小樽経済専門学校の小樽商科大学への昇格を支援している。故郷の福井県丸岡にも様々な恩返しを行っており、中でも丸岡城への支援は大きな功績として讃えられている。

丸岡城は天正4（1576）年に柴田勝家の命により甥・勝豊によって築城され、明治以降も天守が解体されずに残ったことで、現存最古の天守として名高い名城である。

昭和15年の修理の際、太吉は総工費の約4割の地元負担金（現在の数千万円程度）を一人で負担することを快諾した。翌年、太吉が丸岡を訪問すると全町をあげて歓迎され、小学生に「少年達よ遠征心を持て」と題した講演を行っている。さらに、昭和23年に福井震災で丸岡城が倒壊すると太吉は再び多額の寄付をし、さらに丸岡町長とともに小樽在住の福井県出身の有力者、松川嘉太郎や角磯ハブタイ屋・角義雄らを訪ね、寄付を募った。

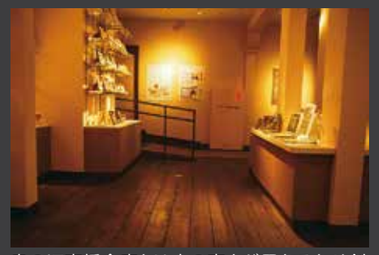
小樽で成功を収めた太吉の故郷への恩返しの物語は、小樽の繁栄の遺産であるこの建物をさらに魅力的なものにしてくれる。

撮影：落合 亮（小樽商科大学写真部）
文章：高野 宏康（小樽商科大学学術研究員）

おたる・しりべしの魅力を発掘する小樽商科大学

館内の様子。建築当時はいくつかの部屋に仕切られていた。

旧荒田商会（小樽市色内1丁目2-17）荒田太吉商店の本店事務所として昭和10（1935）年に建築。木造2階建て。左右対称の外観、白枠に囲まれた明るい茶色の壁面が特徴的。荒田商会は奥の旧高橋倉庫（現・ステンドグラス美術館）を買い取り連結させて営業していた。その後、オルゴール堂海鳴楼、石原プロの「おもしろ撮影館」等を経て、平成28（2016）年、アール・ヌーヴォーグラス館となる。旧高橋倉庫、左隣の旧通信電設浜ビルと中庭で結ばれており、一体として歴史的な景観を創り出している。平成6年、小樽市指定歴史的建造物に指定（第52号）。



奥の旧高橋倉庫とは床の高さが異なるため斜路でつながっている。

建物奥は旧高橋倉庫と連結されている。荒田太吉の「太」が印象的。

入口。左右対称となっている。

入口付近の天井は建築当時のもの。

2階はアール・ヌーヴォーグラス館となっている。

2階へ通じる階段。建築当時のもので、かなり急角度となっている。

【参考文献】『荒田太吉翁 一夕昔ばなし』（私家版、1972年）、『北海タイムス』（1965年8月11日付）、『小樽の建築探訪』（1995年）、『歴史的建造物の街 小樽』（2012年）、『歴建ガイド』（小樽再生フォーラム、2016年）

【謝辞】渡邊洋子さん（ニトリ小樽芸術村学芸員）にご協力いただきました。感謝申し上げます。

小樽聖公会（おたるせいこうかい）

小樽の歴史と深く関わる人物たちとゆかりを持つ教会

水天宮の丘の中腹にあり、小樽の街を見下ろすように建っている瀟洒な教会が、小樽聖公会である。近年、マッサンの妻、竹鶴リタが通っていた教会であることが判明し、メディアで紹介されるようになったが、リタ以外にもこの教会は小樽の歴史と深く関わる様々な人物とゆかりを持っている。

聖公会は英国国教会系統の教派で、カトリックとプロテスタントの中間的な宗派と言われる。明治13（1880）年、北海道で宣教を開始。小樽では同28年に山田町で小樽聖公会議所として創設された。小樽聖公会信徒第一号は、同35年に受洗した小樽駅（現南小樽駅）三代目駅長の井高虎之助であった。

明治13年6月に小樽初の伝道を行ったのが、アイヌ伝道に尽力し、「アイヌの父」と呼ばれたジョン・バチェラー（1854-1944）である。英国聖公会のデニングとバチェラーは日高・石狩地方のアイヌ伝道の帰路、手宮で説教会を開催した。バチェラーは、小樽聖公会で明治35年、40年、大正10（1921）年の3度管理長老を務めている。

榎本武揚らが所有する小樽の土地開発を推進した北辰社の三代目支配人として知られる寺田省帰（1857-1942）は、小樽聖公会と深い関わりを持っていた。寺田は明治31年から36年まで小樽聖公会の教会委員を務め、稲穂町講義所に新設された教会所属の済美女学校の幹事となっている。

石川啄木の妹ミツ（1888-1964）は、明治40年5月、盛岡から次姉の嫁ぎ先であった小樽に向かい、翌年、日本メソジスト小樽教会で洗礼を受けた。この頃、ミツは小樽聖公会でオルガンの手ほどきを受けたと言われる。同42年夏、ミツは小樽聖公会の小児会（幼稚園）の助手として働くようになった。大正2年から全国各地の聖公会系の教会や施設に仕え、同11年には聖公会司祭と結婚した。

小樽聖公会は小樽高等商業学校（現小樽商大）とも関係が深い。小樽高商の教授・木村重義は、昭和6（1931）年から16年まで小樽聖公会の教会委員を務めた。竹鶴リタの友人だった、アン・ステーブリー（1898-1963）は、昭和10年5月に着任後、小樽高商と英語聖書研究会を開始し、多数の学生が聖公会を訪れた。

小樽聖公会は、小樽市指定歴史的建造物に指定され、調度品なども含め建築当時の面影が濃厚に感じられる魅力的な建物だが、様々な人物とのゆかりは、当時、教会が近代文化の発信地であり、小樽の歴史に深く関わっていたことをいまに伝えてくれる。

撮影：落合 亮、王 禹潼（小樽商科大学写真部）
神野 真由（小樽商科大学大津ゼミ）
文章：高野 宏康（小樽商科大学学術研究員）

礼拝堂内部。長椅子や調度品は建築当時の面影をとどめている。

小樽聖公会（小樽市東雲町10-5）
明治41（1908）年、建築。木造平家。建物の中心軸に切り妻の3つの屋根（玄関、母屋、尖塔）が並び、屋根に鐘撞堂をのせている。玄関脇の窓は左右対称に配置され、星形模様のバラ窓、やや幅広の尖塔アーチ窓が特徴的。軒のレース状の装飾はアメリカで流行したカーペンター・ゴシックの特徴を示す。軒先にはシンプルな飾り破風板がついており、玄関上部は和風建築にみられる懸魚のようになっている。外壁は下見板張り。平成3（1991）年、小樽市指定歴史的建造物（第28号）に指定。

尖塔アーチ窓のステンドグラス。鮮やかな青と赤が印象的。

鐘撞堂。鐘は昭和7～9年に「聖鐘基金」の積立金で購入した。戦時期に供出され行方不明となっていたが、戦後、小樽港の倉庫内で発見された。

星形模様のバラ窓、軒のレース状の装飾、懸魚風の飾り破風板が特徴的。

洗礼盤。十字架と三位一体の意匠が施されている。

オルガン。「オルガン基金」の募金によって購入されたもの。最近補修された。

手前から小樽聖公会、本妙寺、水天宮の鳥居。様々な宗教施設が集まっている。

【参考文献】『日本聖公会 小樽聖公会百二十年の歩み』（2000年）、『小樽の建築探訪』（1995年）、『歴史的建造物の街 小樽』（2012年）、『歴建ガイド』（小樽再生フォーラム、2016年）

【謝辞】永谷亮さん（日本聖公会北海道教区・執事）にご協力いただきました。感謝申し上げます。

＊小樽聖公会の建築年（1908年）は、小樽聖公会の文献の記述に依拠しています。

旧衣斐質店（きゅういびしちてん）

小樽に現存する貴重な伊藤整ゆかりの建物

小樽の冬の一大イベント「小樽雪あかりの路」が、小樽出身の作家・伊藤整（1905-1969）が最初に出版した詩集「雪明りの路」（1926年）にちなんでいることはよく知られている。都通りのアーケードと静屋通りの間、地元では静屋仲通りなどと呼ばれる道幅の狭い小路沿いにある趣きのある木造家屋・旧衣斐質店は、伊藤整の親友・川崎昇の下宿先で、二人が詩集の構想をはじめ、文学や恋愛を語り合った場所である。

大正12（1923）年の夏、伊藤整が小樽高等商業学校（現・小樽商科大学）の2年生だった頃、川崎昇が編集していた文学雑誌「青空」を復刊させる資金づくりのため、花園公園通りに夜店を出し、小樽高商附属実践工場でつくられた「高商石鹸」や、塩谷や忍路で摘んだ薔薇やハマナスを販売していた。この衣斐質店の二階で、二人は夜店の売り上げの計算をしたり、伊藤整が自費で出版しようと考えていた詩集について相談していた。

当時、伊藤整は夜店で販売する花を摘みに塩谷の実家へ一日おきに帰っていたが、それ以外の日は衣斐質店の二階で暮らしていた。『若い詩人の肖像』には、伊藤整が小樽の西洋料理店で知り合った女給をその部屋に招いて話し合っていると、衣斐質店の主人に注意されたエピソードが書かれている。伊藤整の「はじめて起こりかけたロマンめいたもの」の舞台がこの場所だったのである。

平成27（2015）年から、雪あかりの路期間中に、この建物と伊藤整のゆかりを紹介するために、地元の小樽静親町会の有志が、旧衣斐質店および静屋仲通りをろうそくの明かりで照らす、「伊藤整ゆかりの道」を開催している。

イベント名称が「道」になっているのは、伊藤整と川崎昇が詩集の題に「道」と「路」どちらを使うか議論したことにちなむ。伊藤整は道を「路」と書くことが、「岡」を「丘」と書くように、その頃の文学で流行になっていたため、あえてそれを避けて「道」にしようとしたが、川崎昇が「路」がいいと言ったので同意した。詩集の題に自分の詩の価値を発見者してくれた川崎昇の考えた字を一字使うことに満足したと書いている。

この建物は、小樽に現存する伊藤整が実際に足を踏み入れていた場所として大変貴重だが、母屋は老朽化が進んでいる。小樽と伊藤整の大切な記憶をいまに伝える地元町会の取り組みはとても意義深い。

撮影：茂呂 亮（小樽商科大学写真部）
文章：高野 宏康（小樽商科大学学術研究員）

伊藤整の親友・川崎昇が下宿していた部屋は建物 2 階、四畳半の一部屋。当時、伊藤整は頻繁に訪れていた。

旧衣斐質店（小樽市稲穂 2 丁目 14）
伊藤整の親友・川崎昇が下宿していたのは大正 13（1924）年頃であり、それ以前につくられている。木造二階建て。衣斐家は滋賀県彦根の出身で、井伊家に仕えた家系。

母屋の向かって右側には、近年まで長期間、婦人服専門店の工場が入っていた。

母屋と石蔵はつながっている。

母屋の側面。板張りが歴史をかんじさせる。

当時、石蔵を設置する質店が多かった。母屋の背後にあり、静屋通りに面している。

伊藤整ゆかりの建物であることを紹介する解説。地元の小樽静親町会の有志が作成した。

静屋通りと都通りの間にあるこの通りは静屋仲通りと呼ばれる。雰囲気のある建物と個性豊かな飲食店が並ぶ。

【参考文献】伊藤整『若い詩人の肖像』（講談社文芸文庫、1998年）、「伊藤整ゆかりの道　開催のご案内」（小樽静親町会、2015年）、「伊藤整ゆかりの家、旧衣斐質店」『新ねっとわーく小樽』（第19号、2016年2月14日）

【謝辞】内山景一郎さん（小樽静親町会）、小川原格さん（株式会社數半代表取締役）にご協力いただきました。感謝申し上げます。

旧久保商店（くぼ家）

かつての問屋街・堺町の記憶を伝える商店建築

歴史的建造物を活用した名喫茶店として長年親しまれた、さかい家が平成28（2016）年12月に閉店後、同29年1月にくぼ家がオープンして建物の魅力が受け継がれたことにほっとした小樽市民はかなり多いのではないだろうか。今回はこの建物をつくった久保商店の歴史をひも解いてみたい。

創業者、久保与三五郎は文久2（1862）年、福井県丹生郡の農家に生まれたが、不作などで実家が没落。北海道で一旗揚げようと決意し、明治23（1890）年頃、福井の敦賀港から北前船に乗って小樽に渡った。与三五郎は、同じ福井出身の板野ステと結婚し、小間物雑貨卸問屋の久保商店を開業した。長男が生まれると将来を考えて玩具や履き物なども取り扱うようになった。東京からブリキ玩具など多種多様な玩具を仕入れ、斬新な品揃えの店と評判になった。

当時、堺町は問屋街として賑わっていたが、日露戦後の樺太貿易拡大により小樽の問屋はさらに膨大な利益を上げるようになり、久保商店も大量の商品を各地から仕入れた。大正8（1919）年、株式会社となり、与三五郎は社長、ステは専務に就任した。現在のくぼ家の店舗向かいに鉄筋コンクリート3階建ビルを新築し、荷物専用エレベーター、鉄製シャッターを設置。小樽初のデパートと言われ、問屋の主人たちも見学に来るほどであった。ステは店員の育成に熱心であったため暖簾分けした店が多く、ベンジー高野商事の創業者、高野勉治もその一人である。

昭和4（1929）年、長男久治が社長に就任すると、拡大路線に転換、経営近代化に着手したが、古い経営形態に慣れた従業員は受け入れず、また新商品として期待した紙の販路拡大に失敗するなど、資金繰りが悪化。人員整理や店舗縮小で切り抜けようとしたが、同6年、解散となった。同9年、与三五郎の六男・博之は残った店員数名と独立し、稲穂町で久保博之商店を開業した。

くぼ家のメニューには、当時、久保商店から海側に見えた大きな岩「立岩」が紹介されている。立岩は北前船をはじめ小樽港に入る船舶が目印とした岩で、子どもたちの海水浴場としても親しまれたが、大正8年に埋め立て工事で破壊された。福井から北前船に乗って小樽にやってきた創業者にとって、堺町通りと立岩通りが交わるこの場所には格別な意義があったと思われる。久保商店の歴史と立岩を紹介するくぼ家から、小樽の歴史への深い敬意が伝わってくる。

撮影：落合 亮（小樽商科大学写真部）
文章：高野 宏康（小樽商科大学学術研究員）

久保商店時代の写真　提供：五宮佐和子さん

旧久保商店（くぼ家）（小樽市堺町 4-5）明治 40（1907）年、建築。商家と石造り倉庫が棟続きになった木造 2 階建て。一部石造。かつて道路側の下屋は母屋から蔵まで一帯に続き、蔵は前後に 2 棟並び、母屋の 1 階は店先として開放できる引き戸が入っていた。大正 13 年から昭和 57 年まで犬島商会（損害保険業）が使用。昭和 60 年から平成 28 年まで喫茶店・さかい家が営業。平成 4（1992）年、小樽市都市景観賞受賞。平成 5 年、小樽市指定歴史的建造物に指定（第 33 号）。

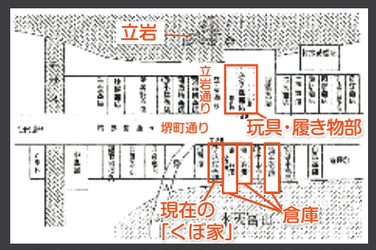
石蔵の内部。石材と木材が交互に積まれている。

重厚な漆喰塗りの扉は以前、奥の石蔵につながっていた。

店内の様子。和風商店の趣きが活かされている。

堺町通り側。以前は店先として開放できる引戸が入っていた。

入口付近の様子。



久保商店時代の地図。現在の店舗は小間物部で、向かい側に玩具・履き物部があり、右隣に倉庫が３つあった。

立岩通り。通りの先に立岩があった。

【参考文献】 久保博之『八十才の悠閑』（私家版、1990年）、『小樽市の歴史的建造物』（1994年）、『小樽の建築探訪』（1995年）、駒木定正「堺町のオアシス・さかい家の孤軍奮闘」（『小樽學』2016年5月号）

【謝辞】 五宮佐和子さん、池田憲昭さん（小樽大正硝子館エリアマネージャー）にご協力いただきました。感謝申し上げます。

ちゅうおういちば
中央市場

満州からの引き揚げ者たちがつくった近代的市場

小樽駅前の中央通りから北側の道沿いに並ぶ3つの細長い建物が、中央市場である。長く市民の台所として親しまれてきたが、空き店舗が目立つようになって久しい。そんな中、閉鎖される入船市場の5店舗が平成29（2017）年4月から中央市場に移転し、さらに新たに2店舗が加わることになり、市場活性化の期待が高まっている。

中央市場は、戦後間もない昭和21（1946）年、満州からの引き揚げ者たちが創設した市場である。細長い敷地は戦時中の防火帯の名残で、空き地になっていたところに木造のバラック2棟を建て、小樽中央マーケットとして発足した。市街地整備のため市から解体と移転を求められるようになったが、創設の中心となった秋田民武は、当時の安達与五郎市長の下へ何度も訪問して引き揚げ者が苦労して創り上げた市場の意義を伝え、何とか存続を許可された。

バラックからの建て替えには莫大な費用が必要だった。同27年、秋田は中央市場協同組合を法人組織として整備し、初代理事長に就任。新たな建物の構想と借入金の償還計画を検討した。細長い敷地内に店舗と組合員の家族の住居も含めた市場として、鉄筋コンクリートで3棟の建物をつくることになり、同28年5月、第1期工事が着工し第1棟が完成。翌年の第二期工事で第2棟が完成した。

借入金は組合員たちが積立てで償還する計画であったが、滞納する組合員が続出し、工事が中断してしまった。緊急臨時総会で激しい論争の末、秋田理事長の決断で続行が決定した。第2棟と同31年に完成した第3棟の間が1年間空いているのはそのためである。完成した建物は当時、最新の近代的市場建築で、大きな反響を呼び、全道から見学や視察が相次いだ。

昭和30年代から40年代にかけて中央市場は全盛期を迎えた。商圏は後志から瀬棚、岩見沢、富良野、砂川方面に至る広範囲にわたり、「ガンガン部隊」の行商の女性たちが出入りして賑わった。しかし、40年代後半になるとスーパーの進出と組合員の高齢化が重なって転業や廃業が相次ぎ、次第に衰退していった。

その後、市場活性化の様々な取組みが続けられている。平成16年に市と実施した「ガンガン屋台」はその後の屋台村ブームの先駆けとなった。近年も顔顔市（ガンガンバザール）などが次々と企画されており、中央市場を次の世代につなげていきたいという思いは創設時から受け継がれている。

撮影：落合 亮（小樽商科大学写真部）
文章：高野 宏康（小樽商科大学学術研究員）

中央市場（小樽市稲穂3丁目11-2）
中央市場が昭和 21（1946）年に開設した当初は木造バラックの2棟だった。現在の建物は鉄筋コンクリート 3 階建ての 3 棟。海側から順に建てられ、28 年 5 月に第 1 棟が建設開始。29 年に第 2 棟、31 年 12 月 27 日に第 3 棟が完成した。1 階の市場の通路の上に 2・3 階の居住スペースが乗っている形状から「げた履き市場」と呼ばれた。水洗トイレが設置されるなど当時最新の設備が導入された。

各棟の 2 階と 3 階は居住スペースになっている。平成 16 年、第 2 棟と第 3 棟の壁面を建設当初の肌色から緑と黄色に塗り替えた。

第 2 棟の 2 階。中央市場組合事務所がある。

第 3 棟。もっとも山側の建物。入口付近には小樽情報を発信する大型サイネージが設置。

第 1 棟。もっとも海側の建物。飲食店が多数営業している。

ガンガン部隊再現ブース（第 3 棟内）。細部までリアルに再現されている。ガンガン屋台の際に設置された。

第 3 棟内部。「市場魂」の暖簾から心意気が伝わってくる。

第 2 棟内部。似顔絵工房、鮮魚店、青果店などが営業している。

ガンガン屋台の際に使用された一斗缶の椅子（第 3 棟内）。当時の賑わいが偲ばれる。

ガンガンギャラリー（第 3 棟内）。平成 28 年 8 月に開設された。

【参考文献】中瀬留治『わが市場の道のりと将来』、『小樽市場物語』（2002年）、『梁川商店街振興組合公式ガイドブック 小樽梁川通り』（2014年）

【謝辞】柴田敏行さん（小樽中央市場協同組合理事長）にご協力いただきました。感謝申し上げます。

あとがき

本冊子をお読みくださりありがとうございました。ご意見・ご感想および建物にまつわるエピソード、建物の保存・活用、解体の動向など、小樽の歴史的建造物に関する情報をお知らせいただければ幸いです。

本冊子の内容は、小樽市内で配付しているフリーペーパー『小樽チャンネル Magazine』（発行：株式会社Ｋ２）誌上で、平成28年5月号から同29年４月号に掲載された連載内容を一部修正したものです。株式会社Ｋ２の中山仁史社長、同社デザイナーの森谷亮介さんに感謝申し上げます。今後も連載は継続しますので、取り上げる建物についてもご意見をいただければと思います。

本冊子の作成にあたり、建物関係者をはじめ、たくさんの方にご協力をいただきました。各章ごとに謝辞でお名前を掲げさせていただいた方以外にもあらためて感謝申し上げます。「小樽れっけん」のコンセプトの発案者である小樽商科大学の江頭進副学長、ご支援をいただいた齋藤一朗教授、撮影に協力してくれた小樽商科大学写真部のみなさんに感謝申し上げます。

今後も「小樽れっけん　小樽の歴史的建造物ものがたり」をよろしくお願いいたします。

ご意見・ご感想および小樽の歴史的建造物関連情報は以下のメールアドレスにお願いします。

連絡先メールアドレス：otarurekken2017@gmail.com

小樽チャンネル Magazine HP：http://otaru-ch.net/otcm/

小樽れっけん
小樽の歴史的建造物ものがたり

編集・発行　国立大学法人小樽商科大学グローカル戦略推進センター
研究支援部門地域経済研究部

〒047- 0851 北海道小樽市緑３丁目５番21号

電 話　0134-27-5482

Ｈ Ｐ　http//www.otaru-uc.ac.jp

発 行　平成 29 年 3 月

文部科学省 地(知)の拠点

市場魂